

浄

monthly
JŌDO

土
5

May 2009





後世の往生、念仏のほかに、
あらぬ行をするこそ、

念仏を妨ぐれば、あしきことにて候え。

この世のためにすることは、

往生のためには候わねば、

佛神の祈りさらにくるしかるまじく候なり。

「江戸の三郎へつかはす御返事」



呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

5月号『唐子人形』

大本山増上寺

第八十八世法主八木季生台下
晋山式



新法主は有縁の諸大徳、増上寺式衆に導かれ練行列で三門から境内に入られた。



平成二十一年三月十三日、浄土宗大本山増上寺の新法主の晋山式が厳修された。第八十八世法主となられたのは、東京は文京区小石川にある一行院の八木季生住職。

当日は浄土宗の総本山親下、六大本山台下が全員揃われた。また全国から多くの有縁の上人が晋山式に参列され盛大な式典となった。

(撮影・小堀祐二)





左端の総本山知恩院門主坪井俊映親下をはじめ、全大本山の法主も八木新台下の晋山を御慶びになられた。



浄土

2009/5月号 目次

カラーグラビア 大本山増上寺晋山式	撮影=小堀祐二	1
ほんとうに生きる	八木季生台下	6
小説快僧渡辺海旭『壺中に月を求めて④』	前田和男	12
朝めし礼賛	麻生タオ	20
善光寺と法然上人	大高源明	22
会いたい人 山崎努さん②	関 容子	26
響流十方	袖山榮輝	34
江戸を歩く 第二十六回	森 清鑑	38
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	51
編集後記		52
教えと法話	生野善應	



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

晋山記念特別ライブラリ

ほんとうに 生きる

大本山増上寺第八十八世法主

八木季生 台下

昭和58年12月号より

近年、宗内で用いられている食作法じきさほうに、「ほんとうに生きんが為に、今この食をいただきます。与えられたる天地の恵みに感謝いたします」というのがある。古くから使われている食作法は、むずかし過ぎて一般的でないが、この食作法なら誰にでも言い易い。簡にして要を得た言葉である。今では宗門内のあらゆる場で、食作法と言えばこの言葉を唱えるようになった。

この食作法の中にある「ほんとうに生きる」とは、いったいどういうことを意味しているのだろうか。「ほんとうに生きんが為に」と言うからには、「ほんとうでない生き方」がある筈である。「ほんとうでない生き方」をしがちだからこそ、食事をする時に「ほんとうに生きんが為に」と唱える訳である。その「ほんとうでない生き方」とはどんな生き方なのか、改めて考えてみると、これもどうもはつきりしない。この辺のところを整理しておくことは、日常生活と関係の深い食作法だけに大切である。

普通に日本語で「いきる」という場合に、その書き方に二通りある。極く一般的に用いられるのは「生きる」という書き方であるが、もう一つ「活きる」という書き方もある。「生きる」と書いた場合、この言葉の意味するものは、心臓が動き、肺が呼吸し、生命活動をしているということである。だから死んでさえないなければ、たとえ植物人間のようになっているものであっても、生きることには於て変わりはない。同じ「いきる」を「活きる」と書いた場合、余りこの書き方は用いられないが、その意味するところのものは、ただ生命活動をしているだけに止まらず、何かもつとその先に、生き方に就いての方法が問題に

なっている。この「生きる」と「活きる」という二つの表現のニュアンスの相違はどこにあるのか、試みに次の二つの言葉を考えてみよう。

生と活との二つの字の下に、花という字を補ってみるとする。生花と活花とである。生花と書けば、普通には音読して「せいか」と読む筈である。生花とは言うまでもなく花屋さんの店頭で売られている花であり、地面に種子を蒔いて、そこから芽が出て育った自然の花を指す。次に活花と書いた場合には「いけばな」と読む。活花とは文字通りに花を活かす法であり、華道として古くからの伝統と流儀とがある。それぞれの流儀には独特の特徴があることであろうが、華道の心は共通であろうと思う。要は花の持っている持ち味が十二分に發揮されるように、姿、形を整え、いける器を考えて花を活かす方法が華道であろう。花には花の持ち味が、花の心がある。春の花には明るさが、夏の花にはたくましさ、秋の花には寂しさが、冬の花には静けさがある。それぞれの花の持つ個性が、味が、十二分に引き出し得るように、一緒にいける花のとり合わせを考え、姿や形に工夫をこらし、いける花器を深く吟味することによって、花が活かされるのである。

同じことは料理にも言い得る。料理には味付けが大事であるが、最後の盛り付けも大切である。折角いい材料を使い、味付けもよくできたものであっても、盛り付けが悪いと、箸をつける前に食欲を失ってしまう。逆に料理の技術が少々お粗末であっても、きれいな皿に上手に盛り付けされてみると、ついだまされてしまう。料理を生かすも殺すも盛り付けで決まる。

華道に於いても、いけかた如何は花の生き死にに關係する。華道のいろいろな流儀は、花の活かしかたに対する家元の考え方の相違に他ならない。花の活かしかたには或る一つの法則がある筈である。その法にのつとつて活けられた花は、花そのものが活かされるだけでなく、その花の飾られた場所を活かす力がある。何も無い殺風景な部屋であつても、活花を飾ることによつて部屋が活きてくる。あの四帖半の寒々とした茶室が、そこに飾られた一輪の茶花によつて活かされるから不思議である。部屋の持つていた飾り氣のない寒々とした感覺が、茶道の持つ厳しさとなつて感じられてくる。一輪の花の果たす役割は大きいものがある。活花は、その花の飾られた部屋を活かすばかりではない。その部屋に入った人の心まで活かす力を持つてゐる。

活花とは本来花を活かす法であるが、華道の価値は花を活かすことによつて、それを飾つた部屋を活かし、見る人の心を活かすその働きにある。活きた花が部屋を活かし、人の心を活かすことができたように、一つのものがほんとうに活きてくると、その周囲全体が活かされてくる。一軒の家の中でほんとうに活きている人がいれば、その家庭全体が活きてくる。一つの集団にほんとうに活きている人がいればその集団が活きてくる。かくして社会が活き、国家が活き、すべてが活かされる。すべてが活きてくるのに、全体を動かす要はない。その中で中心をなすものがほんとうに活きれば、全体が動かされる。

私の中で中心をなすものがほんとうに活きてくれば、私の全体が活かされ、ほんとうに生きる喜びに満たされる筈である。その私の中で中心をなすものとは、何でもいゝという

のではなくて、「ほんとうに」と呼ぶことのできるものでなくてはならない。私の中で「ほんとうに」と呼ぶことのできるものとは、私を生ましめ給うた大本の親である所の如来から賜った仏の性、仏性をおいて他にない。他の如何なるものも「ほんとうに」と呼ぶにふさわしくない。世間虚仮唯仏是真である。私の中に存在する仏性を活かすことができれば、そのとき私が「ほんとうに生きる」ことのできた時である。華道で花を活かす理法があつたように、仏性を活かすのにも理法がある。それが仏法であり仏道であらう。

このレベルで「いきる」と言うときには、始めに述べたような「生きる」と「活かす」の区別はもう必要がない。生きることは活かすことであり、活かすことになってくる。「ほんとうに生きる」をこう定義してくると、冒頭にあげた「ほんとうでない生き方」というのははっきりする。ほんとうでない生き方とは、何時消えてしまいか判らない肉体や名聞利養のみに執着し、欲望の充足に振り回されている日暮らしが、真実の人生だと思つて生きている生き方である。そうと判っていながらも、真実の自己を活かすことを忘れ、目前の損得に血眼になつてゐる毎日を考えると、煩惱無辺だとつくづく思う。孔子は日に三省すると言つたが、三度の食事の度毎に「ほんとうに生きる」ことに思いを致し、この私をほんとうに生かす為に、あらゆる天地の恵みが準備されていることに感謝して、今日もまた、おいしい、味わいのある食事がしたいものである。

法然上人鑽仰会[講演会]のお知らせ

講師

阿満利磨

明治学院大学名誉教授(2006年4月から)

仏教雑誌『連続無窮』主宰

『法然の衝撃』『法然を読む』著者

近著『歎異抄－注解・現代語訳・解説』(ちくま学芸文庫)(2009年5月刊行)

演題

法然上人のお念仏

それまでの宗教意識を改革した法然上人の念仏。

その念仏にこめられた“思い”とは。

いまなお色あせない法然上人の魅力を探る。

会場 増上寺三縁ホール

6月26日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演(4:00終了予定)

会費 1,000円

当会会員無料

問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四回

カルピスの
命名者として

三島海雲との交遊録その1



似通った境遇の海雲と海旭

NHKのラジオ番組「光を掲げた人々」の「新しい時代の聖者・渡辺海旭」の回を、相馬黒光と同じように懐かしく聞いた海旭ゆかりの人々がほかにもいた。本邦初の乳酸飲料「カルピス」の考案者にして創業者の三島海雲である。

三島も、ニュアンスはいささか異なるものの、黒光と同様に、このラジオ番組に違和と不満をおぼえた。最後まで耳をすまして聞き入っていたが、いつまでたっても海旭と三島との交遊が片言隻句たりとも出てこない。そういうえば、三島とも長くて深い交遊のある新宿中村屋の相馬家の人々も出てこない。

——海旭を語るのに欠かすことができない、わしと相馬愛蔵・黒光夫妻をはずすとは、天下のNHKはいったいどういう料簡なのか。

三島はかたわらのコップのカルピスを一口すすると、時々雑音のまじる真空管ラジオに向かつて、おもわず不満を投げつけていた。そして、三島が戦前ムツソリーニを称えたことが、また相馬夫妻が右翼の巨魁・頭山満と親交深かったことが社会の公器でつまびらかにされると、GHQから圧力がかかるやもしれぬという配慮なのだろうか、三島もまた黒光と同じ感懐をいだいたのだった。

そんな違和を覚えながらも、ラジオ番組を聴き終えた三島海雲は渡辺海旭との出会いを懐かしく反芻しはじめた。

三島は海旭より六歳下の明治十一年（一八七八）生まれ。産（と）れたところは三島が大坂府下の箕面、海旭が東京下町の浅草と遠く離れてはいるものの、生い立ちには共通点がきわめて多い。

ともに十三歳で得度。幼少より聡明で勉学を好み、海旭は浄土宗宗学本校（芝中学・芝

高校の前身)、いっぽうの三島は浄土真宗の西本願寺文学寮(龍谷大学の前身)をともに優秀な成績で卒業。また、海外生活が長いことでも共通している。海旭は明治三十三年にドイツに留学し同四十三年に帰国、かたや三島は海旭に遅れること二年の三十五年(日本を離れ大陸に渡って起業家として様々な事業を手がけ、海旭より遅れること三年後の大正四年に帰国。海旭も三島も海外生活は足掛け十有余年におよんだ。宗教家と実業家という職業の違いはあったが、両者には仏教に帰依している点で、因縁まことに浅からぬものがあった。そのなよりの証しが、「海雲」と「海旭」と二人とも「海」がつく号をもつことであろう。

もう一つ加えると、どちらもともに若いころは目鼻立ちのとなつた美丈夫。年を重ねてもなお好男子然としており、本人たちは肯じないだろうが、周囲に信奉者・崇拜者を生

んだ要因の一つにこれを指摘する人は多い。

日本一の音楽家と高僧のお墨付きでカルピス誕生

さて、そんな似た者どうしの二人なのだが、ようやく縁が結ばれるのは、大正六年(一九一七)。三島三十九歳、海旭四十五歳のともに脂の乗り切った壮年のときであった。

二人を出会わせたもの、それは三島海雲の生涯の分身ともいふべき「カルピス」である。そもそも三島がカルピスを世に送り出し、渡辺海旭と出会うまでには、まさに万巻の講談本を費やしても余りある波乱万丈の物語がある。それをはしよるのは、忠臣蔵を語るのに、堀部安兵衛高田馬場の助太刀の段も、お軽・勘平悲恋の段もとばして、さわりのさわりだけをつないで討ち入りの大団円を披露するようなもので、まことにもって味気ないかぎりだが、紙幅の制約もあり、あえてその誇りを

覚悟で大はしりにはしよると、こんな顔末であった。

明治三十五年、三島は二十五歳の時、英語教師の職を辞して、単身北京へと渡った。貿易会社を興し、大陸各地を馬車で巡って日本の雜貨を販売。やがて日本の軍部から軍馬調達の仕事をうけ、内蒙古（現・内モンゴル自治区）に入る。そこは三島の生まれ故郷の湿润な風土とは大きく異なつて、寒暖の差甚しい乾燥の地であつた。三島はしばしば体調をくずすことがあり、それを癒してくれたのは、当地に暮らすジンギスカンの末裔たちが愛飲する伝統の飲料、モンゴル語で「ジョウヒ」と呼ばれる高級栄養食品だった。のど越しが爽やかで、旨い。しかも心身の調子を整えてくれる。三島には、異郷の地で不老長寿の靈薬に出会った思ひだった。

さらに三島は、大隈重信伯爵の言説に啓発されて、現地の生活向上に資せんと在来種

綿羊を改良する事業に転じるが、辛亥革命で、後ろ盾の清が倒されて頓挫し帰国する。帰国後は、靈妙なる乳酸を日本に広めんと決意し、内モンゴルの伝統の乳酸飲料を現代に甦らせるため開発に取り組むこと二年。試行錯誤を重ねて完成をみたのは、脱脂乳に砂糖を加えて発酵させ、それに当時世界的研究として注目されていた鈴木梅太郎博士のカルシウム研究に発想をえて、カルシウムを加えたものだった。

難産の末に呱呱の産声をあげた我が子にようやく名前をつけるときがやってきた。当時最先端であつたカルシウムを取り入れたことから「カル」、仏教で「美味の中の美味」を意味する「醍醐味」をサンスクリットで「サルビルマンダ」というが、そこから「ビル」をとってつなぎあわせて「カルビル」という名を思いついた。しかし、発音してみるとどうも響きがよくない。そこで末尾を一字いじ

って「カルピス」としたところ落ち着きがよい。だが、製品自体の中味には自信はあったが、この名前の正当性に不安が残る。はたして厳しい世間で通用するのか。やっぱり原義に忠実に「カルビル」でいくか、それとも響きのよい「カルピス」か。さんざん悩んだ。

ここからが実業家・三島の真骨頂だった。持論の「教えを乞うならその世界の一番に聞け」を実践したのである。それを三島自身は「日本「主義」と名付けていたが、マーケティング理論にもなっており、現在でも大いに通用する手法である。

三島が白羽の矢を立てた「日本一」は、音楽界の第一人者の山田耕筈（「赤とんぼ」をはじめ数多くの唱歌を作曲したあの山田耕筈だ）と仏教界の第一人者の渡辺海旭だった。

またこの二人の組み合わせが実にユニークで意外性があり、従って「カルピス誕生秘話」の物語性を高めることになる。これまた三島

の実業家としての天性の直感といっていだろう。

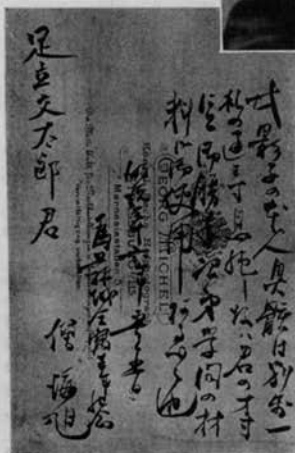
まず山田からは、以下の根拠で、音楽的には「カルピス」がよいとのお墨付きを得た。すなわち、「カルピス」は *ca·lu·pi·su* の4音節ではなく、*cal·pis* の2音節。そして、*cal* は「a（ア）」、*pis* は「i（イ）」の母音からなっていて、「ア」は口が開き、いっぽう「イ」は口がとじた状態で、これを形にすると「漏斗」になる。そこへ *pis* の *s* が圧力となって「音声学的にしまりがあって発展する」というきわめて明晰かつ説得力のある示唆をうけた。

ついで渡辺海旭をたずねると、海旭の答えは次のようなものだった。醍醐味はサンスクリットで「サルビルマンダ」だが、そもそも仏典では乳・酪・生酥・熟酥の四味の最上に醍醐味をおき、四番目の熟酥を「サルピス」といって「熟成の味」を意味する。したがっ



△上圖は明治三十六年撮影にかゝるもの。左圖はその裏面にして即ち故人が死後の遺骸を學問研究の爲めに解剖に附すべきを約せられたるもの。

(次の覺書參照)



足立文太郎君

信田

て、「カルピス」は「カルシウム」をふくんだ「サルピス」という造語として仏教語源的に「大いに結構だ」と太鼓判を押してくれたのである。

これで売れると、三島は確信をもった。そして現実はそのとおりになった。西本願寺文学寮時代の後輩・(馬+麗)城卓爾からカルピスは甘酸っぱいから「初恋の味」をキャッチフレーズにしたらどうかという提案があり、当時の社会風潮から判断して「不謹慎すぎる」といったん断った三島だったが、最終的には乗った。折りしも大正デモクラシーの時代が到来、モボ・モガたちが領導する自由で奔放な風潮ともマッチ、物議をかももしはしたがそれがかえって話題をさらい、人々の好奇心に火をつけて、カルピスは瞬く間に「国民的飲料」になったのである。

「あれは実に痛快事だった」と生涯で一番の思い出にふけていた三島は、ここで現実に

戻った。それにしてもなぜカルピスと海旭の関わりを、このラジオ番組ではとりあげないのかと、またぞろ三島の中で、不満が首をもたげたのだ。

自分のことが出てこないから不満なのではなかった。三島はそんな自己顕示のつよい男ではない。経営者たちの間では「人徳者」で知られていた。

三島は自分のことよりも海旭の考えたのである。三島同様、自己顕示とはおおよそ無縁であったあの海旭が、「カルピスの名づけ親はわたしだ」としばしば周囲にもらしていたことを三島もよく知っていた。つまり、海旭にとって、「カルピス」はいつまでも忘れえぬ「サルピス(熟鮭)」、すなわち甘露で味わいぶかい思い出なのだ。ならば、海旭の生涯を物語るのに、カルピス命名のエピソードをはずすのは、人の情と人の道にもとるのではないか。ああそうか。公共放送は特定の

商品を紹介してはならぬという例の配慮からなのか。だとしたら……。三島はNHKの狭い料簡にあきりはてた。

実際に、海旭がカルピスの命名者であることは、当時はもちろん現在でも、海旭の周囲ではよく知られている。とりわけ彼が校長をつとめた芝中学の卒業生たちは折にふれそれを聞かされていた。余談になるが、筆者も、校門前に鎮座していた海旭師の銅像を六年間、登下校時に仰いでいたが、この小説を書くまでは、おそらく先輩からの情報をあやまって記憶したのだろう、この母校の校長をカルピスをつくった偉い人だと思いこんでいた。(カルピス「の名前」をつくった人を、「名前」を飛ばして記憶してしまったようだ。なんたる粗忽者) そのいっぽうで海旭が戦前の日本宗教界を代表する碩学にして社会事業家であったことなどつゆも知らなかった。

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

「最後の晚餐」は朝めしの献立

向田邦子さんの話です。調べてみたら、彼女が飛行機事故で亡くなったのは昭和五十六年（一九八一）。何ともう二十八年前にもなるんですね。

ぼくは『あ・うん』など彼女が脚本を書いたテレビドラマは好きだったし、週刊誌に連載していたエッセイを読んでは、その話術に「うまいなあ」と思っていたのですが、向田邦子という存在をそれほど意識していませんでした。あらためて彼女の著書を薦めてくれたのは女友達で、亡くなつてずいぶん後のことでしたが、最初の著書である『父の詫び状』を文庫本で読んですっかりファンになりました。とくに『父の…』をはじめとするエッセイが好きで、気持ちが悪くたびれている時など残された何冊かのエッセイ集の中から一冊を取り出して読んでいたりして、いまでは薦めてくれたその女友達には感謝しているほどです。

そして拙著『朝めしの品格』の元となった「朝めし話」をある雑誌に書くことになり、思い出してぜひ紹介したいと思ったのが、向田さんの食に

関するエッセイのある一節でした。

それは、友達と「最後の晚餐」に何を食べたいか、と語り合っていて、自分なら……という話です。最後の晚餐とは、人生の終焉に口にする食事です。彼女はこう書いています。

私だったら、まず、煎茶に小梅で口をさっぱりさせる。／次に、パリッと炊き上がったごはんにおみおつけ。／実は、豆腐と葱でもいいし、若布、新ごぼう、大根と油揚げもいい。茄子のおみおつけもおいしいし、小さめのさや豆をさつとゆがいて入れたのも、菌ざわりがいい。たけのこの姫皮のおみおつけも好物のひとつである。／それに納豆。海苔。梅干し。少し浅いかな、というくらいの漬け物。茄子と白菜。たくさんもぜひほしい。／上がりに、濃く入れたほうじ茶。ご馳走さまでしたと箸を置く……

（「食らわんか」『夜中の薔薇』所載）

そして、「と言いたところだが、やはり心が残りそうである」と追記して、熱いごはんに卵をかけたのも食べたい。昨夜の塩鮭の残ったのもあった。ライスカレーの残ったのをかけて食べるのも悪くない……と続くのです。

向田ファンならよく知っていますが、彼女は食べることも料理をつくることも大好きで、それが高じて自分のレシピの料理を供する「ままだ」という気軽に飲食できる居酒屋を赤坂に開いたほどでした。亡くなったあとは妹さんが切り盛りしていました。そこも前述の女友達に教えられ何度か行ったことがあります。また、彼女のレシピ本も数多く出版されました。

しかし、そういう人が自分の最後の晩餐として思い浮かべたのが、「煎茶と小梅で……」から始まって、「ごはんにおみおつけ」にこだわりの、納豆、海苔、梅干、浅漬け“ときて、卵かけごはん”といい、残り物の塩鮭や残り物のカレーにこころを馳せる……これらは晩餐の献立ではない。まる

っきり朝めしではないか。食いしん坊だった向田さんが、最後に還ってゆきたい食は朝めしの献立（だとは書いていませんが）だった——このことに何か強く感じるものがありました。

この献立は特別な、つまりご馳走ではなく、大雑把に言ってしまうと、近代日本人の当たり前の朝めしの定番です。そしてほくは、ここにあるのは温かさであり、ホッとする安心感であり、さらに懐かしさだと思いました。言い換えれば、日本人の「食のふるさと」なのではないかと。

拙著は、ほくも共感したこの「食のふるさと感」について、なぜなのかと調べたり、あーだこーだ考えたりしたのですが、果たしていまの若い人や子どもたちはどうなのでしょう。

「最後の晩餐? Mツクのダブルバーガーとシェイク」などと言われかねないのではないかと。

そう想像するものがっかりしません?

善光寺と 法然上人

長野・法樹院住職

大高源明



善光寺は日本最古の御仏を祀る我が国の代表的霊場です。

本年は善光寺の七年に一度の御開帳の年に当たります。四月五日より五月三十一日まで長野市は大勢の参拝客で賑わいます。

御開帳とは、一般には寺院で普段公開しない仏さまを一定の日を限って、参詣者に拝観させることをいいます。しかし、善光寺の御本尊阿弥陀如来は白雉三年（六五二年）以来勅命により絶対の秘仏とされているため、住職すらも目にすることはできません。そこで、御本尊に代わって、平素は善光寺御宝庫に安置されている前立本尊を本堂に遷して公開します。これが「善光寺御開帳」です。

この前立本尊は、鎌倉時代に御本尊の御身代わりとして造られたもので、ひとつの光背の中に、阿弥陀如来を中央にして観音菩薩、勢至菩薩が並び、独特の「一光三尊」のお姿をされています。これは秘仏の御本尊を模して造られ、御本尊とは同じ形をしていると言われています。

御開帳は、江戸時代には不定期に行われていた

ようですが、明治十五年から数え年で七年ごとに一度、午年と子年に行われるようになり、第二次世界大戦で一時中断の後、昭和三十年に再開されてからは、丑年と未年に行われるようになりました。

御開帳の期間中は、前立本尊の阿弥陀如来の右手に結ばれた金の糸が、本堂前の回向柱に「善の綱」によって結ばれます。この回向柱に触れることで阿弥陀如来と尊いご縁を結ぶことができるといわれ、参詣者は回向柱に触れようと長い行列を作ります。

さて、善光寺は宗派を問わないお寺ですが、現在在浄土宗の大本山善光寺大本願、天台宗の善光寺大勧進並びに山内の院・坊によってお守りされておおり、私たち浄土宗のものには大変ご縁の深いお寺です。

また、善光寺には生身の阿弥陀如来がおられるという信仰が古くからあり、多くの浄土教の祖師、証空上人、親鸞聖人、一遍上人などが参詣しています。

親鸞聖人は、越後から関東へ向かう途中に参詣し、百日ほど滞在されたといわれています。その際に、善光寺如来に松の枝を奉納したと言われ、現在本堂外陣の賓頭盧尊者像の左に活けられています。さらに、経蔵南側の小道にあるお堂には親鸞聖人が爪で彫られたという「爪彫阿弥陀如来」が安置されています。

また、『一遍聖絵』には、一遍上人が善光寺を参詣した様子が残されています。

浄土宗では、三祖良忠上人が二祖聖光上人に出会ったのは、いわば善光寺如来の引きあわせによるものであり、その後良忠上人が九州から関東に布教に向かう途中に参拝をとげられ、長野県各地にその足跡を残されております。

このように浄土教信仰の聖地ともいえる善光寺ですが、法然上人が参詣されたという記事は残念ながら、お伝記にはまったく見ることができません。しかし、善光寺山内にある浄土宗の坊には、法然上人が善光寺を訪れたとする伝承があります。

善光寺仁王門東側にある小路は、法然上人がお



通りになったということで、法然通りあるいは法然小路と呼ばれ、現在は院坊が並んでいます。この中、善光寺本堂に向かって、右側に向仏坊、左側に正信坊があります。向仏坊には、弘化四年（一八四五年）に焼失するまで、法然上人開基と伝えられる善導堂があったといえます。

また、正信坊前には「圓光大師御遺蹟」並びにこの辺りがかつて「法然堂町」という地名であったことを示す二本の石柱が立っています。この石柱からさらに視線を上に向けると「法然堂」と書かれた板額を見つけることができます。

この法然堂は正信坊の御堂にあたり、宿坊の二

階にあります。御本尊には、法然上人が善光寺逗留のおり、自ら彫ったと伝えられる法然上人像が御本尊として安置されています。

御本尊法然上人像の上には、知恩院七十七世日野靈瑞大僧正猊下の讃文が掛けられており、そこには正信坊が法然上人の御遺蹟であり、法然上人像が法然上人御自作であることが記されています。

御本尊法然上人像は、壮年の頃の法然上人とも思われ、大原勝林院の法然上人像によく似ているといわれます。

ただし、正信坊の御住職若麻績春実上人によると、この法然堂は、良忠上人が善光寺参籠中に四十八日におよぶ『親経疏』の講説をされたその地に建てられ、法然上人像についても良忠上人が奉納されたという説があるそうです。

法然堂では、毎年一月二十五日には、大本願の尼公上人を迎え、御忌会がお勤めされますが、その際には、法然上人の好物と伝えられる黒豆ととろろ芋が御供えされています。

法然上人は二十四歳の時、嵯峨の清凉寺、南都

を訪れています。それ以降、四十三歳で浄土宗をお開き下さるまでの約二十年間の行実は、よくわかっていません。あるいはこの間に法然上人は善光寺をお参りされたのでしょうか。

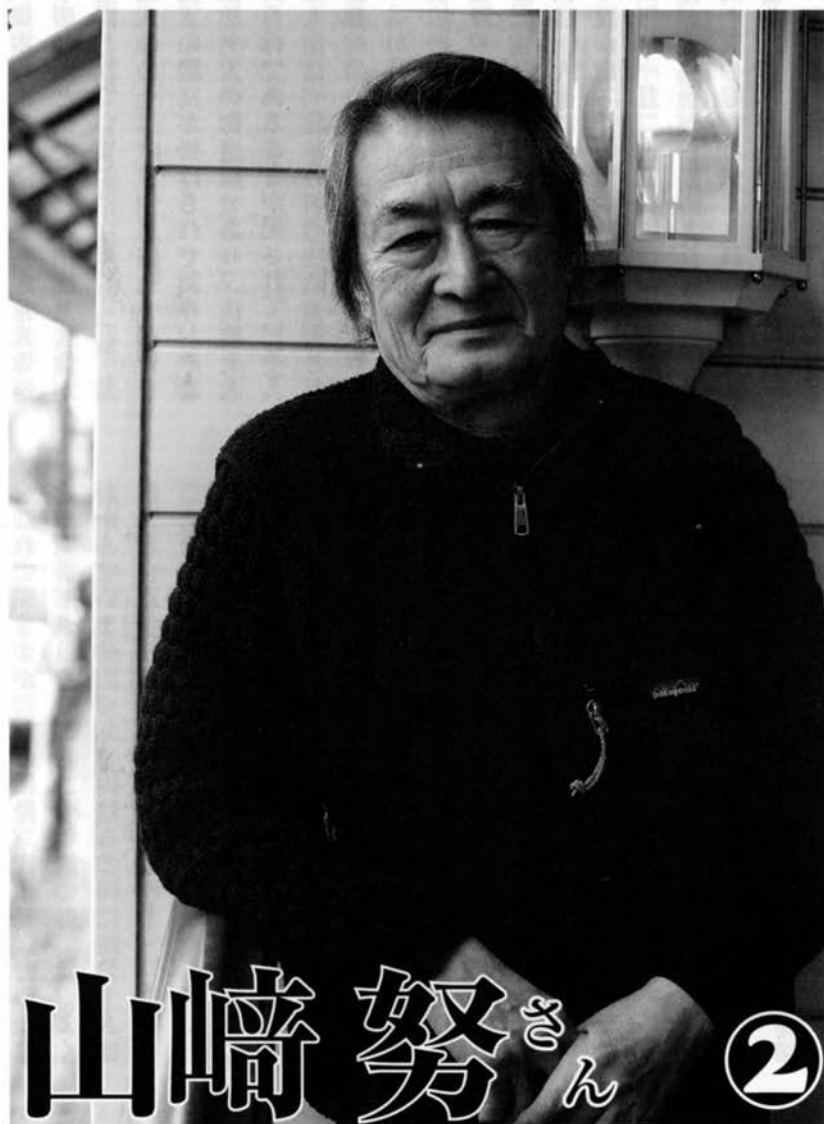
また、法然上人の善光寺参詣がたとえ伝説であったとしても、ここには生きた法然上人のぬくもりが残されています。法然上人の善光寺参詣を深く信じる人々がおり、お名前を冠した通りがあり、今でも好物が御供えされている。今日において法然上人に出会うことができる地を御遺蹟とするならば、法然堂は間違いなく御遺蹟のひとつと言えるのではないのでしょうか。

法然上人が善光寺を訪れたという伝承や、法然堂の存在はあまり知られていません。御開帳で善光寺をお参りされる方は、あわせて法然通りを散策されてはいかがでしょうか。

※法然堂は一般公開をしておりません。お参りを希望される方はあらかじめ正信坊さまにお尋ね下さい。

連載

会いたい人 関 容子



山崎 努さん

②

撮影／タカオカ邦彦

平成十年一月、山崎さんは新国立劇場の開場記念公演『リア王』に主演したが、その出演決定からの二年間、長い準備期間の緻密な演技プラン、激烈な稽古の様子、そして公演中の毎日を、日記形式で綴った『俳優のノート——凄烈な役作りの記録』（文春文庫）。まるで自らの身を激しく傷めつける修道僧の記録のようで、読んでいて苦しいほどだった。

香川照之が「解説」で、〈俳優という人種がどれだけ「演じる」ことにおのれの精魂、人生、意識、肉体、信念を注ぎ込むことが可能であるのか、その最高レベルの探求を」とく「堪能できた」と書いているが、まさにそう。この人の舞台は迂闊な態度では客席に座るまい、という気にさせられた。ただし、香川も〈山崎努よ、もう一度舞台に立ってくれ。その勇姿を我々に示してくれ。それが、本書を読んだ人みな最大の読後感になっているのだから〉と書く通り、『リア王』以来、山崎さんは芝居に出ていない。なぜなのか。

「演劇は本質的に言って俳優のものだと思っています。近ごろは演出家の存在が大きくなって、一人の感性で一つの感性を作ろうとする。生身の俳優たちのそれぞれ演じることが收拾がつかなくなる。それが面白いのに、一人で收拾をつけて、口当りをよくして、お客さんの観方まで決めてしまう。現代の演劇が面白くなくなってる理由です。今、ぼくは映像のほうに興味がある。信頼できる魅力的な判断をする監督に、自分の演技を差し出して、全面的に託すわけです。ぼくが面白いと思ってしたことがその作品に必要でなかったり、またその反対だったりして取捨選択される。それが演劇と違って面白いところです」

演劇と映像という話題になったところで、生前の芥川比呂志さんがいつか私に語ったことをふと思い出した。

「家内はね、映画ではぼくのラブ・シーンにやきもちを焼かないんだけど、芝居でそんな場面を観ると、何だか機嫌が悪くなっている

んですよ(笑)

山崎さんはこの話をこう解説する。

「芝居は実際の姿を見て、肉声を聞いてるから。映像はフィルムに定着された過去の行偽だから、やきもちを焼いてももう遅い(笑)。でもその方がかき立てられることだってあるでしょう。もしかしたら芥川さんは映画では激しいラブ・シーンは演じなかったのかもしれない」

若い頃の山崎さんに、大きな影響を与えたと思われる芥川比呂志の話を、もう少し続ける。

『俳優のノート』によると、芝居の「初日には必ず奥さんを招ぶんだぞ、二人で芝居を作ったんだからな」と芥川さんに言われ、山崎さんはそれを守ってきた。芥川未亡人に対してもずっと招待状を送り続け、その度に「何となくババに似てた」と喜んでくれたという。「俳優としては聞き捨てならないせりふだけ

だね、でも夫人の気持ちはよくわかり、それはそれでよかったと思いました」

「芥川さんが亡くなってしばらくして、彼の使った台本を二冊、奥様からいただきました。『ヘンリー四世』と『リア王』。ぼくは演りたい役のことは決して口外しないんですが、この二本はいつか機会があつたら、と内心願ってたものなんです。奥様がどうしてこの二冊をくださったのか、わかりません」

山崎さんは平成三年に『ヘンリー四世』を主演しているが、私はピランデルロの芝居はどうも苦手なので、以前の芥川さんのときのも両方観のがしている。『リア王』のほうは昭和四十三年、福田恒存演出、芥川比呂志のリアで、山崎さんが屈折した策略家エドモンド役を颯爽と演じたのを観たし、平成十年、鶴山仁演出の山崎リアも観ている。」

芥川さんの『ヘンリー四世』については、丸谷才一さんが語っていた。

「正気と狂気を表現するのに、演技が説明的、

図式的であんまり面白くないんです。幕切れで緞帳の間にはさまれちゃったりね。そんなドロくさいことをするなよ、って感じだった。芥川さんがエッセイスト・クラブ賞をもらったときのお祝いのパーティーで、福田恒存がいくらなんでも褒め過ぎだよというくらい絶賛したら、彼が途中でボケツトから白いハンカチを取り出して汗ふいてね（笑）、もつと洒落た芸を見せてくれよ、と思ったことがある」

山崎さんも笑いながら、

「緞帳にはさまれるとか、ぼくは将来全然違うように演じようと思って観てましたよ。よく言えばビジュアルでわかりやすい。あえて言えば少し古いと思いました。そのへんを芥川夫人はよくわかっていらして、パパは外側から役作りをしたけど、山崎さんは内側から作るのね、とおっしゃった。外側派は衣裳やメイクアップにも凝って、せりふ廻しや身体の動きから内側を喚起する。内側派は気持の動きからせりふや動きを発生する。どちらか

というと地味ですかね」

歌舞伎の芸談でも、「形から入るか、気持から入るか」がよく論じられる。でもめざすところは一つで、どちらにも名優はいる。

そして話は、芥川さんの晩年に及ぶ。

「病院から夜遅く毎晩のように電話がかかってきたんですよ。『マクベス』をお前で、俺が演出するからやつてくれないか。東南アジアふうな『マク・ベス』としたら、ホー・チミンみたいで面白いだろう。マクベス夫人は鳳蘭でどうだ？ っ。て。ぼくはいいんじゃないですか、っ。て相手をする。毎晩遅くです。ただどな山崎、睡眠は大事だぞ、寝てから電話がかかってきたら、もう寝てますからって奥さんに言わせるんだぞ、っ。て（笑）。起してるのは本人なのに。慶応病院の暗い廊下の赤電話ですよ。病人の芥川さんが心配だから、こっちは早めに切ろうとするんですが、向うが切らない。ゼーゼーハーハー息切れして、そこでしばらく間ですよ。あくる晩は、俺は

こういう状態だからな、やつぱり無理だ。演出プランのノートを残しておくから……お前……やつてくれ」

山崎さんの語りが真に迫って、切なくなる。「するとまた次の晩に電話があつて、ひと晩寝ると雪が降り積もるようにアイディアがいっぱい降ってきて、ぼくの掛け布団が真っ白になっているんだよ、つて。じゃやりましようよ、つて言うと、次の日はやつぱりダメだ、つて、そのくり返し。亡くなって二、三年してから、奥様に、何かノートは残ってませんでしたか？ つて伺ったら、探してくださったけど、そんなのはどこにもなくて、多分ババの頭の中のノートだったんでしよう、つてことでした」

丸谷さんがしみじみと言う。

「芥川さんは、寂しかったんだなあ、可哀そうだったねえ」

ところで山崎さんはどんな少年時代を過し

たのだろうか。

「親父は友禅染の職人でした。無口でしゃべらない人だったし、戦争から帰って一年で亡くなりましたからあんまり思い出はないんですが、どういう声だったかは憶えてて、やつぱりぼくに似てたのかなあ。生まれたのは千葉県の松戸です。きれいな川の流れる町で、父の友禅の工場もその川つぶちにありました。川の匂いというのは多分水藻とか、死んだプランクトンの匂いの混ざったのかも知れないけど、とてもなつかしい。それで何となく落ち着くんですね。最近気がついたんだけど、この四十年、ずっと多摩川の近くにいます。川から離れたくないんだな、と思います。で、松戸では丘の上に高射砲部隊があったので、空襲で狙われるからというんで疎開したんです。県道に近いところに本家があつて、そこから子供の足で二十分くらいのところの土蔵に、母と妹と住んでました」

山崎さんは終戦のとき小学校三年生。ある



「俳優のノート」(2003年文藝春秋刊文庫)の表紙。
山崎さんの役作りの様子が日記の形で綴られている。

日、いまお父さんが復員して帰ってきてきて本家にいる、という知らせがあった。

「秋の夕暮れですよ。町なかで育つてるから裸足で藁ぞうりなんかはいたこともなかったし、あたりは薄暗くなつてきて足許もぼんやり見えないし、粘土のような坂道には落葉が散つてたり栗のイガが落っこちてたりする。ふだんは滑ったり転んだり大変なんだけど、そこをぼくは一気に駆けぬけたんですね。途中でハタと気がついたのは、明らかにぼくは

いま演技してるとのこと。親父が帰ってきたことを子供として喜ばなきゃいけない。狂喜しなきゃいけない。それを親父にも回りの人にも見せてるんですね。俺は何と嘘つきで、ずるいやつだろう、とそのとき思ったものですよ」

自己分析のできる繊細な少年なのに。

「ぼくが俳優になつてしばらくして、そういう普段はできないことがある状況の中に置かれるとできてしまう、普段生まれてこない感情も生まれてくる、それが演技というものだな、と思い当りましたね」

最近、山崎さんは千葉県流山の利根運河を久々に訪ねてみたという。

「池内紀さんの本に、明治二十一年にできた利根運河を設計施行した親分は、オランダ人の技師だった、という件があった。父方の御先祖にオランダへ行つたきりになつてゐる変つた人物がいる、と聞いたことがあつて、逆算で年代を調べると、その男がちょうど二

十代前半のころに利根運河造りに参加して、そのオランダの技師と出会つてるんじゃないか、と想像したんです。それで利根運河を六十年ぶりに訪ねた、当時のままで、川べりまで降りて行ったら、なつかしい川の匂いがした。多摩川にはあの匂いがないんです。川べりに腰をおろしてね、以前、オランダのハーデンというところに行つたことがあつたけど、そこにその御先祖の子孫がいて、街角で東洋人ばいばくに似た男にバツタリ出遭つたりしなかつたか、なんて勝手にストーリーを作つてみましたけどね」

想像を楽しげに話す山崎さんを眺めると、顎の中央に日本人離れしたくびれがある。そう言えば山崎さんは舞台であまり創作劇の日本人の役を演じないことに気づいた。

「だって日常的なドラマなら映像のほうがずっといいでしょう。舞台というのは飛躍したほうが楽しい。いつそ『アラビアン・ナイト』とかね(笑)」

(つづく)

その時世尊、韋提希に告げたまわく。汝今知るやいなや。阿弥陀
仏、ここを去ること遠からず。

【観無量寿経】

そこで釈尊がマガダ国の王妃、韋提希夫人に語り出した。

「そなたには今、分かるだろうか、どうだろうか。この世界から阿弥陀仏のところまで、それほど遠くはないことを。」

そこは近いか遠いのか

「乗り換え時間は五分」「同意しますか」

長野から上諏訪まで特急列車の切符をインターネットで予約した。諏訪湖を見下ろす山腹の分譲地にお檀家さんのお宅があり、そこで御尊父の法事を勤めるためである。長野から上諏訪へは長野発名古屋行きの特急「しなの」に乗って松本へ行き、そこで松本発新宿行きの特急「あずさ」に乗り換えることになる。

その日の法事は午後二時から。お誂え向きの「あずさ」で上諏訪に到着するには松本での待ち合わせ時間が五分間。長くはないが、駅の階段を上り下りして線路の向かい側のホームに行くだけのこと。「乗り換えには五分もあれば大丈夫」と「同意します」をクリックし、切符を手配した。

当日、長野発「しなの」の座席指定は最後尾寄りの二号車。松本駅で最寄りの階段から「あずさ」の出発ホームに降り、線路を挟んだ向こう側のホームに辿り着くと、特急「あずさ」は出発まで二、三分の余裕を残して待っていた。

私はまずまず予定通りとホッとし、「あずさ」の座席指定を確認した。「一号車の〇×」。で、自分が今どこにいるかという、列車最後尾の「十一号車」入り口付近。一号車を見やると、これがまあ、結構な距離だ。残り時間を考え

ると予め車内に入っておくべきだろうが、最後尾から先頭車両までの一列車分、御衣を着たまま法衣を詰め込んだ重いカバンを片手に車内の通路をカニ歩きするの何である。行けるところまで行ってみようとホームを歩き出した。

でも、いざ歩いてみると、十秒、二十秒が長く感じられる。いつ発車ベルが鳴るか緊張して身構えているせいだろう。少々早かったかもしれないが、「もう頃合い」だと何両車目だかに乗り込んだ。やがて出発のベル。しかし、ここで思いもよらぬ事態に出くわした。じつはこの「あずさ」、二つの列車が連結してあり、連結部分は行き止まりになっている。移動するには一端、ホームに降りて次の車両に乗り込まねばならない仕組みになっていたのだ。

出発のベルが鳴るなか連絡部分で行き止まる私。大慌てで列車から飛び降り、前の車両に駆け込んだ。ほんの数秒が何倍にも感じられる出来事であった。

ところで、阿弥陀さまがまします西方極楽浄土は十萬億仏土の彼方にあるという。天文学的な数字をはるかに超えた距離の譬えだ。はたして無事に辿り着けるのか、不安に駆られたとしても不思議はない。そこで經典は「阿弥陀仏、ここを去ること遠からじ」と説く。何とも、逆説的な言い回し方である。

そこを去ることを先賢は説き明かす。いくら遠いと言ったって「極楽浄土はあ

る」とお釈迦さまがはっきりお示しになっているのだし、極楽往生だって、あつという間の出来事。それに極楽世界のことをずつと心に想っていれば、いつでもその世界を想い描けるようになる。だから極楽は「遠からず」である、と。

上諏訪の駅に着くと、法事の御施主さんが車でお迎えに来てくれていた。駅から諏訪湖を見下ろすご自宅まで十分はかかるだろうか。それでも「この坂の桜が満開になると見事です」「自宅の二階から見ると諏訪湖の花火大会は最高」といったお話に、あつという間にご自宅に着いた。松本駅のホームの方が、よっぽど長く感じられた。

法事を勤めた後、仏間から外を眺めた。西に傾きかけた春の陽に諏訪湖が照り輝く。もう少しすれば、ここに桜満開の坂道が続くのか。夏には花火で湖面が彩られるのか。駅からあつという間だったせいか、美しい風景を眺めにここに来るなら、多少遠くとも苦にはならないだろうと、そう思った。

春彼岸の穏やかな一日。「ここを去ること、遠からず」が少しばかり分かるような気がした。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

第二十六回

江戸を歩く

運河の町

大江戸ウォーカー
森 清鑑

神田から九段坂へ

幕末、講武所南堀に面した道向こうに蘭方医、伊藤玄朴が住んでいた。玄朴は長崎でシーボルトにオランダ医学を学び、安政五年、神田お玉が池種痘所を開設。これが後に西洋医学所となり、東大医学部に発展する。玄朴の屋敷堀に向かって右に行くと細々とした水路に出くわす。この辺り周囲は全て旗本屋敷である。水路に沿って南に下ると蜻橋せみはし。この小さな橋からは大きな流れとなり掘留が形成されている。その先に組橋くみはしがある（組橋とはこの辺りに幕府料理人が住んでいたらしい）。橋を潜ると飯田川になり、やがて雉子橋けしこはし（こら辺りで幕府接待用の雉の養殖が行われていた）。そこから御堀に出る。

蜻橋から組橋の西側一帯が元飯田町である。家康が江戸入府して初めてこの辺りを視察したときには、農家が僅か十七軒。案内したのが飯田喜兵衛。以後彼が名主となって飯

田町と呼ばれるようになった。組橋を渡って西に直進すれば、恐ろしく急な坂道、九段坂の登りとなる。北斎の九段坂絵を見るとそれは急峻でまるで山道のようなのである。長谷川雪旦はこの辺り一帯の情景を小川町方面から描いている。絵の下、中央に組橋。橋の左側が飯田川、右側が掘留。掘留は右隅、蜻橋から小さな水路になる。掘留の上に、二つの家並みの固まりがある。元飯田町である。滝沢馬琴はここで「南総里見八犬伝」を書いた。元飯田町の左右、中央を三本の坂が登る。組橋を渡った一番左の坂が九段坂である。堀（牛ヶ淵）に沿って登る急峻な坂道には九段の土留めがあった。九段坂の右、掘留の火の見櫓から並行して登る、やや広い坂道が中坂なかざかである。この坂は九段坂よりも広く、人々の往来も多い。神田祭の神輿や山車はこの坂を往来した。そしてさらに右側の蜻橋から登る坂が綱つなの木坂である。この坂は狭い。これら三本の坂が行き着くところが広小路。ここを左に

行けば正面に田安御門が見える。三本の坂に挟まれるように家並みが整然と整備され密集している。九段坂登り口を左右に横切る道の左角が井関縫殿正の屋敷。その前が安政三年に設立された蕃書調所である。ここから九段坂の右側沿いは土留め幅に石垣が築かれ、その寸法で武家長屋が建っている。六代將軍家宣の頃には、坂上のお花畑を管理する役人をつここに住ませたという。嘉永、安政の頃には、井関家の対角に、寄合、水野監物の二百坪の屋敷があり、続いて御葉園がある。

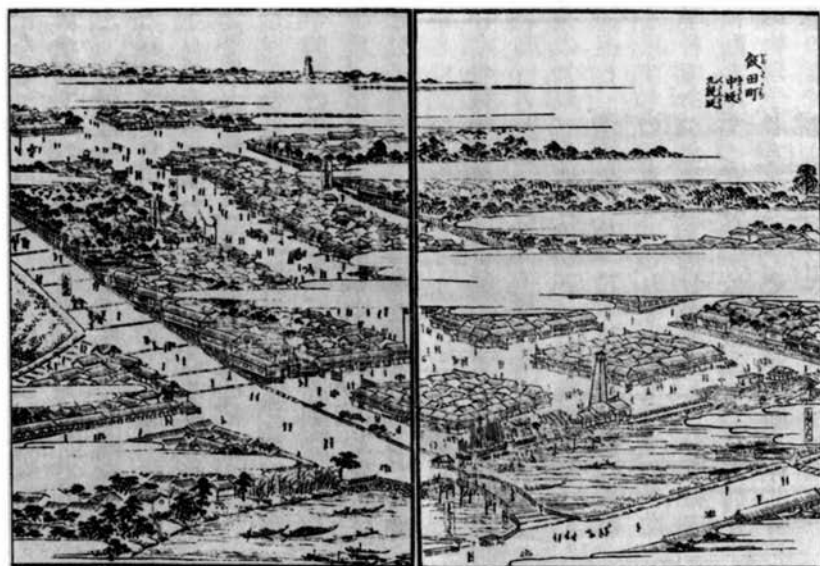
馬琴は、寛政五年（一七九三）二十七歳から文政七年（一八二四）五十八歳までの約三十年間をここ元飯田町に住む。その住まいは、雪旦が描く、元飯田町中坂下、左側の家並み、掘留近くにあり、ゆかりの井戸が今も残されている。硯井戸。馬琴が筆を洗い、硯に水を注いだ井戸である。大作「里見八犬伝」の執

◆散步図

筆は、文化十一年（一八一四）から天保十三年（一八四二）まで二十八年に渡り続けられた。全百八十回、九十八巻百六冊に及ぶ大長編小説。すると最初の十年間はこの地で書いたことになる。筆名は曲亭馬琴。曲亭とは若い頃は放蕩無頼の遊び人で「くるわでまこと」、つまり、まじめに遊女に尽くしてしまいう野暮な男という意味。その彼が二十四歳で山東京伝の弟子となり、やがて喜多川歌麿や写楽を発掘したことで有名な葛屋重三郎と出会った。それから馬琴は作家一筋。正に筆一本の生活を送る江戸期最初にして最後の人となる。とにかく超多忙な作家活動でも、絶対に締め切りを破らない、真に律儀な作家であった。ために晩年、失明し、神田の息子の家で、息子の妻女に口述筆記してもらい、八十二歳で没する六年前に八大伝を完成させた。

番書調所と川本幸民

九段坂を登り始めの左側、堀（牛ヶ淵）ま



◆江戸名所図会 飯田町 中坂 九段坂

で蕃書調所がある（昭和館、九段会館）。嘉永六年のペリー来航から、世情は一変し、洋学研究・教育機関の設立が急務となり、幕府は安政三年（一八五六）、当地に蕃書調所を設置した。この名は洋書の調査機関を意味する。設立当初は蘭学教育を中心に始められたが、外交、西洋の諸科学技術研究、英、独、仏の語学教育へと発展していく。七年後の文久三年からは護持院ヶ原に移転（学士会館、如水会館）。そして維新後、開成学校、大南校、東京帝国大学になる。ここで注目される人物が川本幸民である。摂津の国、三田藩の藩医にして日本有数の蘭学者。江戸で伊東玄朴と並び称される蘭学者、坪井信道の安懷堂に入門。幼き頃より秀才の誉れ高かった彼は、名藩主、九鬼隆国の援護を受け、日本一の蘭学者を目指して学問に取り組む。そして信道の右腕になる。塾の弟分が後の緒方洪庵。二人の親交は終生続く（洪庵の適塾の弟子、福沢諭吉は様々なことで幸民に相談すること

になる）。幸民の師、坪井信道は、最高峰の蘭学者であると同時に、誠実な人格者であった。幸民は師の教えを受け継ぎ、学問に対する真摯さを貫いた人物である。一時は薩摩藩主島津斉彬（なりきり）に請われて、いわゆる集成館事業（製造工場群建設）の技術顧問となる。しかし、その以前から蕃書調所の教授としてこの学問所の発展に尽くす。幸民は医業の傍ら、物理、化学の研究に尽くす。医学の基礎科学としての物理・化学の重要性を痛感していたからに他ならない。多くの科学著書があり、日本の科学の発展に貢献。まずは、安政三年に刊行された、「気海観瀾広義」。幸民の妻、秀の父親、青地林宗が著した「気海観瀾」を捕捉し、体系化した、我が国物理学書の基礎を成すものである。これをもって医学の補助学科であった物理・化学が独立し、分野確立に動き出す。青地林宗はその意味で日本最初の物理学者であった。その長女が師、坪井信道の妻であり、林宗亡き後、信道は七人の子

供を自宅、すなわち塾に引き取ったのである。分けても三女の秀は聡明で塾を取り仕切る存在であった。坪井信道の仲介で幸民は、秀と結ばれる。そして何と仲人は伊東玄朴であった。信道も玄朴も若き日、青地林宗の世話になっていたのである。玄朴が仲人を買って出たのは、若き日、にっちもさっちもいかなかった時に林宗が貧しい中から五両の金を用立ててくれた恩義を忘れることができなかったことからである。蘭医として將軍御典医まで登り詰めていた玄朴は幸民と秀の結婚式当日、この話をして泣き崩れた。隆盛を極めた玄朴の塾は授業料が高額で有名であったが、その資金で当時は途方もなく高い洋書を買ひ揃え、これを彼の塾生に限らず、広く開放した。幸民もその恩恵に預かっている。これだけでなく、信道と玄朴の親交もあり、幸民はいろいろと玄朴の世話になっている。信道亡き後、蘭学の最後の砦となった玄朴は、意を決し、神田お玉が池に種痘所を開く。これが

東大医学部に発展するのである。無論、この時、幸民も協力している。幸民は化学という言葉を最初に創出した人とされている。しかし、彼の真髄は実験科学にある。マッチの試作に成功。嘉永四年にはカメラ、銀板（フィルム）、現像、定着液を作る。嘉永六年には芝露月町の医業所兼私塾でビールを試醸。これはビール醸造の起源をなすものでこれにより彼はビールの始祖と呼ばれる。西洋からやってきた蒸気船、付属器械の機構、構造を明らかにした名書「遠西奇器述」の刊行。薩摩藩が作った我が国最初の軍艦「昇平艦」はこの書を基に製造されたという。島津斉彬には兵器、砲術、電信機、写真機、地雷の製法、製塩法など多岐に亘る資料を翻訳、献上している。文久元年には名書「化学新書」を上梓（初めて化学という言葉を使う）。蕃書調所では蘊蓄を傾けて理化学を教えた。蕃書調所は一橋御門外に移転、洋書調所となる。幸民は教授職を続け、英語、ドイツ語にも取り組み、

「英吉利会話」も編集している。息子清次郎には英語を教える。清次郎は開成所の英学教授となり、明治を引っ張る。

旗本夫人日記

九段下の三百五十坪、旗本井関家の屋敷。旗本夫人、井関隆子の日記は庭の離れの一室で天保十一年（一八四〇）から五年間の日常を記したものである。子の親経は將軍家齊の正妻、広大院の掛り、孫の親賢が家慶の御小納戸役を務めていた関係で城内の出来事もいろいろと伝えられている。十一代將軍家齊は天保十二年一月三十日に他界されたとされているが、日記によればすでに一月七日に没している。水野忠邦の天保の改革を強引な政策を実行しているとして大名領地替えを手厳しく批判。長い治世の家齊すらかなわなかった十二代家慶の日光参詣の様子、雨降りしきる未明に発生した天保十五年の江戸城本丸、大奥の火災焼失の状況も生々しく伝える。火と

煙は自宅目前から立ち上っており、子の親経は広大院を助けようと混乱の中を駆けめぐるが居場所が分からず、やつとのことで救い出す。日記は江戸で起こった様々な事件や催し物にも触れる。明らかに落語「品川心中」の原点とも云える、武士と遊女の心中事件。この実話では、心変わりした女を懲らしめようと幽霊を装うが、女は驚きのあまり亡くなってしまう。他に悲劇の旗本心中事件など。また中坂の上り途中、左側にある産土神、築土明神（田安稲荷）へお参りの模様。石段を登ると白虎、玄武など四神の旗や鉾。妙見菩薩のところでは御神酒を振る舞われる。ここの祭神は平将門の首だが、石櫃に入れられ一切開かれたことはない。言い伝えでは都で晒された首がここに飛んできたとされるが、そんなはずはないので、しかるべき人が持ち帰ったものであると別当が説明してくれた話などが記されている。中坂は九段坂より広く、人々の往来も多かったが、事実、神田祭りの

山車はここを通った。組橋を渡って右に折れ元飯田町の井関家奉公人の家に陣取り、料理と酒を楽しみながら長い行列を見る。例年であればもっと盛大に行われるはずの神田祭も天保改革の質素儉約を固く申し渡され、縮小せざるを得ないとばかり。日常の催事も事細かに書かれている。例えば隣家も武家屋敷であるが、食事や来客の時にそこから漂ってくる糞尿の臭いに閉口する時があるとか、廃棄物処理にまで及んでいる。また、興味あることに両国や佃島の花火が九段下の井関家からもよく見えたらしい。特に七月七日の七夕に行われる佃島の花火は圧巻で子供達は朝から喜び騒いでいる。現代の花火と遜色ない多種多様な花火が上がり、その音は九段坂まで鳴り響いた。殊に西の丸の大殿は海を見渡せるほどなので素晴らしい見物であったそう。それに比べ両国の花火はかすかな光といった案配であると記されている。確かに鉄形恵斎が描いた江戸の鳥瞰図、「江戸一目図屏風」

を見ると、九段坂、中坂は迫り上がる台地であり、海に向かって下がっているので遮蔽物はなく、大川や江戸湾が見渡せる位置にある。

九段坂上へ

九段坂は今と異なり、道幅も狭く山を登るような感じである。左側の堀は切り立つ断崖のような景色。右側は、石垣とその上に建つ長屋。人々は登りに難儀している。荷車を押し上げる人夫の姿。明治になってからも大八車の後押しを生業とする押屋がたむろしていたという。登り切ると右、広小路、左、田安御門。そして九段上。ここから仰ぐ富士は眼前に迫る迫力で、明治になると富士見町と命名された（現、九段南二丁目）。夜ともなれば月を愛でる、江戸でも有数の名所であった。田安御門を左手に見て、過ぎると千鳥ヶ淵。右手は、広大な火除明地で弓馬稽古場、馬場。さらにその先は武家屋敷になる。その江戸三番町通、二角目に神道無念流斎藤弥九郎の練

兵館があつた（これらは全て現在の靖国神社内）。

斉藤弥九郎と練兵館

神道無念流、練兵館は当初、組橋付近にあつたが、天保九年の火災で類焼。三番町通に移転、以後三十年、隆盛を誇った。練兵館は、千葉周作の玄武館、桃井春蔵の士学館と並ぶ江戸三大道場。門下生に桂小五郎、高杉晋作、品川弥二郎、井上聞多、伊藤博文。異色の存在では新撰組の芹沢鴨、永倉新八などを輩出している。とりわけ長州藩士が多い。それは、ここ、三番町（後の靖国神社敷地内）に引越した頃、長州藩士数十名が道場破りに押しかけてきたことがあつたが、弥九郎の三男、歎道が一人で全員を打ち倒したという。以後、長州藩は道場のレベルの高さに驚愕するとともに敬意を表し、多くの藩士を練兵館に送り込むことになる。その教義は自在で素早い身体の動きを基にした、極めて実戦的、合理的

な豊富な戦法。弥九郎の次男勸之助は突き技の名手として知られる。これらの息子を育てた弥九郎の剣技の凄さは論を待たないが、注目すべきは非常に進んだ考えを持っていたことである。それもその筈、当初の組橋道場は、幕府きつての開明家、江川太郎左衛門の支援による。二人は同門で旧知の仲、若い頃から行動を共にしている。練兵館の稽古は厳しかったが、弥九郎は剣を磨くばかりでなく、門弟に自由な議論を許し、砲術、兵学も教授。そのため門下生に蘭学を学ぶ者も多かった。道場経営を息子に譲って引退すると代々木の隠居宅で洋式訓練を施すほどであつた。

【参考文献】

「旗本夫人が見た江戸のたそがれ」深沢秋男 文春新書
「蘭学者 川本幸民」北康利 P H P 研究所 等。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 董

〔特選〕 伏せ舟の辺りすみれの咲き乱れ 浜口 佳春

どういう舟かは読み手に任されているが、すみれとの取り合わせを思うと、海より川のほうがよからう。川漁師が岸辺に舟を伏せて干している。農繁期で、しばらくは漁も休みだと思ふのも面白いと思う。

〔佳作〕 野仏に寄り添ふごとく董咲く

河合富美枝

すみれ野に道草をして下校の子

町田 麻紀

犬連れて摘みし董の一握り

山口 信子

● 白魚

〔特選〕 雲影に白魚の群れ見失う

石原 新

白魚は春早い頃、河口辺りに遡上して産卵する。それを網で取る。この句のも河口に群れて来ているのだろう。澄んだ水に透けて見

えていたのが、雲の影が来てふっと見えなくなつた。白魚の様子をよくとらえている。

〔佳作〕

白魚鍋外は粉雪となりにけり

中島富士子

酔うほどに箸の進めり白魚飯

佐藤 雅子

手の平に踊る白魚噉りこむ

斉藤 幸雄

●自由題

〔特選〕

縄文の土の匂いや路の臺

山内 桃児

縄文時代の集落の跡か土器でも見つかったのだろう。発掘はまだ続いているかも知れない。そんなところを見に行つて見つけた路の臺だ。そう思えば何となく縄文の土の香りがするようである。縄文の匂いは面白い。

〔佳作〕

梅ちらりほらりどの子も器量よし

内藤 隼人

大寒や岬遙かに富士浮きて

井村 善也

廃校の窓いっぱい春の海

佐藤 ゆう



浄土誌上句会のお知らせ

兼題

季語ではありません

橋学自由題

誌上句会〈編集部選〉

■董

におうごと生きんと思う花董
踊り子も通りし道か山董
天折の姉の忌近し白すみれ
駅前顔の大きなすみれかな
野にすみれ光のなかに西門寺
一息を入れてすみれの地蔵坂
すみれ咲く段々畑島日和

金谷友江
佐藤雅子
中島富士子
目黒 裕
小林苑を
斉藤幸雄
井村善也

締切・二〇〇九年五月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年七月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■白魚

波切って白魚舟の帰りけり
白魚や家族写真に知らぬ顔
白魚にポチンポチンと目のありぬ
骨と眼が泳いでおりぬ白魚かな
白魚を大事に貰う桶の波
白魚のひとつかたまりに売られけり

河合富美枝
鳥羽 梓
斉田 仁
浜口佳春
井村善也
井口吾郎

■自由題

滔滔と母なる川の雪解水
春雪の山ふとろに阿弥陀仏
人生に答はあらず春爛くる
鯽捌く修羅の燭となりけり
ふらこの揺れて日向に食み出しぬ
口あけており早春の鉄工所
赤き門くぐりて春の確かなり
欠伸するメタボの猫や水温む
寒椿男の指を拒みけり

佐藤雅子
金谷友江
中島富士子
河合富美枝
工藤敏行
目黒 裕
井口 栗
小林暢夫
中嶋敏博

さっちゃんね

60かい目

かまち♡ひろう



4月1日より、かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されます。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞以上朝刊、中国新聞・神戸新聞以上夕刊)



菖蒲の葉身に貼り付けて遊ぶ子ら 岱潤

端午の節句は、元々午のはじめの日を意味し、葉草である菖蒲を採る行事があったことが、菖蒲と尚武が音が共通であるところから、男の子の節句になったようだ。それが昭和二十三年の法律の公布から「こどもの日」になる。当初は子供の未来を考える催しもあったようだが、今では子どものご機嫌を取る日、子どもを楽しませる日になってきている。

先日お檀家さんと法事の後会食をしたとき、施主の孫になる五歳の男の子に、全員が振り回されっぱなしであったことに驚いてしまった。その子のわがままと

落ち着きのない振る舞いに、大人がいいなりになっていることに、不愉快な思いが募った。少し前政府の「子どもが怖い」というテレビコマーシャルがあったが、最近の子どものわがままは度を超していると思われる。出された物には皆文句を言い、自分のしたい放題に走り回る。親も祖父母も皆何も言えず、その子が納得するまで、様々な物を提示続けるその姿に、あきれるほかなかった。

しかしそうかと思うと、二十歳過ぎの優しすぎる男の子に出会うことがある。「草食系」と言うそうで、そういう男性が今の女性には人気があるという。

乱暴な子どもと、親思いの優しすぎる

大人。ゆがんだ社会は、人間の心を持って遊んでいるかのようだ。振り子が大きく振れ始めている。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十一年四月二十日
発行 平成二十一年五月一日

発行人 佐藤良純
編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運院)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・向向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

見人^{けん にん}有善^{う ぜん}

人に善あるを知る
無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

誰でも善き一面を持つ。
それを万人が理解することが大切。

バス・電車の「お年寄りや体の不自由な方の優先席」は、老人、妊産婦、松葉杖の人が楽に乗物を利用するために、会社や地方自治体が善意で設置したに違いありません。しかし利用状況は、いまひとつ。

利用者の心理は複雑です。車両を一つの社会と見ますと、そこに老人や身障者は押し込められる

ような意識も持ちかねません。

この人たちがこのような扱いを「よし」としな
いのは当然。

老人、身障者、妊産婦が乗車してきたら、ニツ
コリ微笑んで席を譲るような社会を培うことがま
ず大切です。

自他の立場で「良」なるものこそ真の「善」。

法然上人鑽仰会の

本

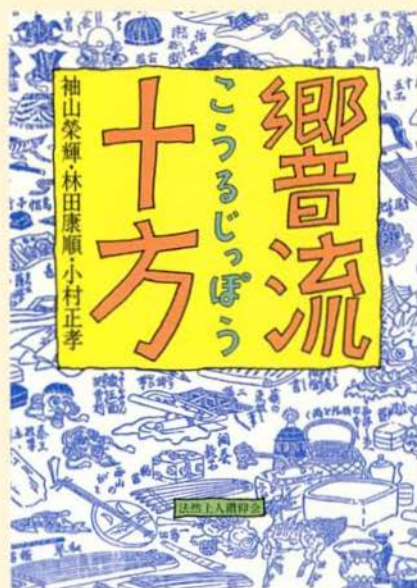
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話/03-3578-6947

FAX/03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう

600円(税別)

『差出人は法然さん』

600円



月刊『浄土』

バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版

1,600円

中綴装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)

『選擇集絵解き物語』含む

20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠(二巻本)」より